

研究資料

御絵鑑

——元禄十三年板の画法書——

綿田 稔

山口県萩市に田中助一（一九一〇～二〇〇〇）という郷土史家がいた。本業は医師（耳鼻科）。一方で萩の生き字引として著名で、およそ萩に関係する事柄で田中の関心が及ばなかったものの方が少ないとさえ言えるのではないだろうか。『防長医学史』（聚海書林、一九八四年）の編纂を中心とする彼の調査研究は、人物個人の履歴の確認に基本を置き、血縁関係や墓の特定という点では今や再現不可能なほどに徹底的である。萩自体がさほど大きな町ではないので、系譜をたどっていけばたいていどこかでつながる。こうして萩の人物の履歴についてはほぼ網羅的に押さえることになったわけで、一方で墓石を調べるうちに石造文化財に詳しくなり、その他、各所で種々の文化財に出会ってはそれについての歴史を調べあげるといこうとを繰り返すうちに「生き字引」となったわけである。日中は本業を、郷土史は夜に研究していたというから、恐れ入ってしまう。その功績により昭和四十五年（一九七〇）には山口県文化選奨（芸術文化功労）を受賞した。淡々と事実を並べる語り口は、郷土史家ひいては歴史家の鑑であると言ってみたくなるが、本業ではなかったことが逆に幸いているのかもしれない。

美術史関係で言えば、『國華』の八二〇号から九二三号にかけて断続的に掲載した合計八本の「雲谷派の人と作品」シリーズ（一九六〇～七〇年）が著名で、これは雲谷派研究の基本資料集としての位置を今も失っていない。

その田中が遺した膨大な資料がある。多くは田中が研究の過程で収集し、記述の根拠とした資料であって、写本やメモ書きだけでなく、史料現物も相当数混ざっている。これを自宅に整理して置いていたというから驚きなのだが、田中の没後、二

〇〇四年に萩博物館に一括して寄贈された。ダンボール二四五箱にのぼる資料は、研究者にとってはまさに宝の山だ。

ここに紹介する板本一冊は、この田中助一資料に含まれているもので、稿者が科学研究費補助金を得て画家関係の資料を目録化する過程で偶然見出したもの。田中がこれを入手した経緯ははっきりしないが、繁澤家関係の資料と同じ棚に置かれていた。この繁澤家というのは、途中で画業はやめて儒家になってしまったものの、雲谷等爾家（雲谷分家筋の筆頭格）の末裔で、絵師時代の資料もある程度伝わっている。その繁澤家の資料を田中は比較的早くから譲り受けていたようで、田中の雲谷派研究の原点がここにあると言っても過言ではない。

その付近にこの板本も置いてあった。田中の整理はなかなか行き届いていて、今回整理をしてもそう混乱することはないから、おそらくこの板本も繁澤家から譲り受けたものだっただろうと思われる。ならばもともと、この板本は雲谷派の絵師が持っていたものである可能性が出てくるわけである。

最初に基本的な書誌情報を掲げておく。

『御絵鑑』上巻一冊 板本 袋綴十八丁 藍色紙表紙 大本（竪二八・一 横二〇・

一センチ） 萩博物館蔵（田中助一氏旧蔵資料）

題簽「和／漢」御絵鑑 智」

表紙裏墨書「甲辰七二成」

内題「御絵鑑彩色仕様卷之上」

一～四丁内郭 竪二六・四 横一七・六

五～十八丁内郭 竪二六・一 横一七・五

大きく分けると文章の部分（一～四丁）と画譜の部分（五～十八丁）とからなる。ノドにふられた連番もそれぞれ一から始まっているので、この両者が本来一具だったかどうかは微妙なところである。ただし紙の具合はそう違わない。極端に時期の違うものが寄せ集められたのではなさそうだ。また本文の末に不自然な余白をとって「元禄十三庚辰曆正月吉旦」とだけあって、板元の表記がない。冒頭に「上巻」

として始まるということもあり、これは明らかに「智」の巻だけが残った零本ということになる。

表紙裏墨書の「甲辰」は元禄十三年（一七〇〇）以降では、享保九年（一七二四）、天明四年（一七八四）、弘化元年（一八四四）、明治三十七年（一九〇四）のいずれかに当たるだろう。購入日だろうか。

題簽には「和漢御絵鑑」とあるので、「御絵鑑」と「和漢御絵鑑」を『国書総目録』で検索すると、静嘉堂文庫と国会図書館にそれぞれ一件、合計二件の類本が出てくるのでそれぞれ調査した。調査順に紹介する。

(1) 表紙

(2) 表紙裏・1オ

(3) 4ウ・5オ

『和漢御絵鑑』三卷三冊 板本 袋綴 黄色紙表紙 大本(竪三二・一 横三二・二 センチ) 国立国会図書館蔵

内郭 竪二六・〇 横一七・五

上卷 十四丁(萩博本後半のみ)

題簽「御絵鑑 智」(表紙ごと新補)

中卷 十六丁(和漢人物十七図)

題簽「和漢御絵鑑 仁」

下卷 十丁(酒吞童子絵十図と探幽の印影)

題簽「和漢御えか、み 勇」

下巻裏表紙裏に板元刊記あり。

〔二都書物問屋〕

京都寺町通松原下ル町 勝村治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛

同 安堂寺町 秋田屋太郎右衛門

同 博労町 河内屋茂兵衛

同 南久太郎町 伊丹屋善兵衛

尾州名古屋本町七丁目 永楽屋東四郎

江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛

同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八

同 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛

同 芝神明前 岡田屋嘉七

同 南伝馬町二丁目 穴山篤太郎

蔵書印「帝国図書館蔵」朱文方印・「明治三六・十・一・購求」朱文円印

この国会図書館本は智・仁・勇の三巻本で、萩博物館本よりひとまわり大きく分厚い紙に刷られている。上巻は萩博物館本の画譜部分(五〜十四丁)と同じもの。つまり萩博物館本の本文にあたる部分がない。下巻は酒吞童子絵で、最後の頁にはその元絵の筆者なのだろうか、狩野探幽の印影が刷られている。下巻末の板元の顔

ぶれを見る限り、幕末期の再板版とみられる。

『御絵鑑彩色仕様』一巻一冊 板本 袋綴十四丁 柿色紙表紙(新補) 大本(竪二

七・三 横一九・二センチ) 静嘉堂文庫蔵

一〜四丁内郭 竪二六・四 横一七・五

五〜十四丁内郭 竪二六・〇 横一七・五

四ウ、本文と元禄十三年刊記の間に板元刊記あり。「書林 撰城下内本町橋詰町

天王寺屋長右衛門版」

題簽「御絵鑑彩色仕様 完」(新補)

内題「御絵鑑彩色仕様卷之上」

下部小口墨書「御絵鑑彩色仕様 完」

蔵書印「静嘉堂蔵書」朱文長方印

備考 五丁以降は酒吞童子絵。十四ウは区画のみで白紙。

この静嘉堂文庫本は一巻本の体裁で、前半の本文部分は萩博物館本と同一。ただし萩博物館本で不自然に見えた本文と年記との間の余白に板元の刊記がある。後半の画譜は国会図書館本の下巻の図柄と同一。ただし最後に探幽の印影はなく、白紙である。

板元の天王寺屋長右衛門については『改訂増補 近世書林板元総覧』(日本書誌学大系七十六)に、「天王寺屋長左(右) 衛門/大坂本町/本朝食鑑 元禄8/*右書に本町と載る。享保九年に、本商売相止候とある(京阪書籍商史)。元禄十一年十一月の大坂未公認本屋仲間二十四軒の一「大坂8巻」と見え、元禄年間の大坂の本屋であることがわかる。

以上を整理すると、次のように考えられる。おそらく元禄十三年の初板当時から少なくとも(1)本文付きの三巻本と(2)画譜だけの三巻本、それに(3)上巻の最初と下巻を綴じ合わせた一巻本の三種類がつけられて、それぞれしかるべき位置に板元を摺りこんで売り出された。萩博物館本は(1)の零本で、静嘉堂文庫本は(3)にあたる。幕末になってその版木を再利用した画譜三巻本の再板が企画さ

れ、売上が期待してのことだろう、下巻末に探幽の印影を追加した上で売り出された。これが国会図書館本にあたる。元禄十三年は本文の成立時期ではなく、初板の時期を指すのなのだろう。

近世初期の画法書としてはすでに土佐光起『本朝画法大伝』（一六九〇年）や狩野永納『本朝画史』（一六九三年）、林守篤『画筌』（一七二二年）、西川祐信『画法彩色法』（一七三八年）、宮本君山『漢画独稽古』（一八〇七年）等が知られているが、画法書の集成は未だかつて行われたことがない。それは近代の美術史学の主たる関心が画史（画家の伝記）と画論にしかなかったからであって、そうこうしているうちに、普通どうだったのかはわからなくなりつつある。近代の文脈の中で日本画が「日本画」として技術的に特殊化していったからである。絵具もすっかり変わった。絵具だけでなく、筆や紙絹のこともわからなくなりつつある（あるいはもうわからなくなってしまった）。その一方で、材料技法の研究は昨今の技術進歩のお陰で飛躍的に進められる環境が整いつつある。ただ、「普通」を共有できていないから、議論がすぐに袋小路に入ってしまうという問題点がある。

この『御絵鑑』のような市販の地味な画法書には秘伝の特殊技法のようなものは記述されないだろうが、一般的な常識は記述されるだろう。限界があっても情報を集成して、時代の常識を炙りだしておくことは、今後のためにも決して無駄ではあるまい。その第一歩として『御絵鑑』を本誌で紹介しておきたかった所以である。世間にはこの手の誰も注目してこなかった資料がまだまだあるだろうから、お心当たりがあれば、ぜひともご一報願いたい。

〔公刊〕萩博物館本『御絵鑑』

御絵鑑彩色仕様巻之上

一、ねん紙の事

うつし物いたすとき、此ねんがみにてうつすなり。此紙のしようハ、「すぎはら紙をよくもみ、杉がらか、なすひのきか、又ひやうたんにて」も、くろやきにして、こまかによくすり、あるひハ大小によらずうつ」物物に水一はい入、めしのとりにゆ三丕、酒三丕にてくろやきをと」き、右に杉原紙へはけにて引、よくひゝて絵をうつさんとおもふとき」本紙を下にしき、又ねんかみのおもてをしたになして、そのうへに絵本」をおき、へらにて絵ほんのとをりきめつくるなり。そのかたち本紙に」うつる。其上をすみにてかくなり。

一、どさ引

すきにかハ拾式匁、明はん六匁、水壺升、あかがねなべにてせんじ、に」かハよくとけ候へは、みやうばん又入。せんじつよく候へはつまり候ゆへ、」水をくわへてよし。

一、やき筆

ひの木のうきすよく枯申をふとばしのごとくにいたし、さきを筆」のごとくとくからし、ふでさきをやき火になり候ハ、やはらかなるはい」にさしこみ、けしつかふ。

一、すみ

こきすミ、中すミ、うすゞみ、五だんにも見合。水にてのへつかふ。（一オ）

一、胡粉こかん

すり木にてよくこまかにすり、やはらかなるもちのかげんに、にかハを」合。水に

てのべつかふ。

一、にかハ合様

いづれの絵の具にてもこまかにすりせんじ、ちやのいろほどにかハ」をとき、や
ハラかなるもちのかげんにいたし、つかふ。そのうち、こんぜうろく」せうにハ、
にかハすこしおほくいれて、筆さきにて水とのべあわせつ」かふがせんいちなり。

一、こんぜう

あらしきを一ばんといひ、其つぎをこんぜう二ばん、そのつぎをぐん」ぜう、そのつ
ぎびやくぐん。いづれもすりわけつかふ。

一、あいろう

はぶたへのきれにつゝミ、うつわ物に水を入、一夜あくけをとりさて」水をすて、
つかふときハしぼる。にかハ、入らず候。

一、せいたい

すり木にてこまかにすり、やハラかなるもちのかげんにかハを合。」水にてのべ
つかふ。こんぜう、あいろうたぐひの、こくつかふときハした」にこのせいたい
かふてよし。

一、花こんぜう

やハラかなるもちのかげんに、にかハつよく、水にてのべつかふ。

一、ろくせう

みぎハ、こんぜうのこしらへ同前。

一、ならろくせう

右ハ、花こんぜう、こしらへ同前。(二ウ)」

一、草のしる

あいろう、しわうにて合つかふを草のしるといふ。あをめつよくいたし」候ときハ、
あいろうをつよく、またきばりこのむときハ、しわうをつよく」それ／＼に見合つ
かふ。にかハいらす。

一、びやくろくの具

にかハあわせのびやくろくに、ごふんをすこし入つかふ。あるひハ青地せいぢのたぐひ、
うすあをきにつかふ。

一、光明朱

極ごくざいしきつかふ。ちよくに入、やハラかなるもちのかげんに、にかハをあハせ」
水にてのべ、なるほどよくすり木にてすり、筆さきにてうハミづと絵のぐとませ合
つかふ。

一、和朱

うすざいしきにつかふ。

一、にくしき

にかは合のしゆ、ごふんにて合つかふ。あるひハ、も、いろたぐひうす」あかへ見
あわせ。

一、えんじの具

にかハ合のごふんに、すこししやうえんじを入、うすきこきハ見合。ある」ひハ花
のたぐひ、是をつかふ。

一、むらさき

ねりえんじの事なり。やハラかなるもちかげんに、すり木にてこまか」にすり、つ
かふ。

一、しど
すり木にて、よくこまかにすり、もちのかげんににかハを合、水にて」のべつかふ。

一、しどの具

にかハ合のしど、ごふんにてあわせつかふ。かきいろのうすきもの也。(二オ)「二」

一、ふぢ色

にかハあわせのごふんに、せうえんじをくわへ、またあいろうすこし入。」これをふぢいろとも、うる見ともいふ。

一、ひわだいろ

つちじゆ、やはらかなるもちのかげんに、にかハをあわせ、少すミを入つかふ。」あるひハ、やねのひわだぶきによろし。

一、わたえんじ

さらに水を入、火にあたゝめ、あつくなり候ハ、わたえんじを入しほり、」よくいで候ハ、又火にてそろく」とさらへほしつけ、つかひ候時、うすき」こきを見合、水おとく。筆にていかやうにもつかふ。にかハ、いれす。

一、しわう

水をいれ、ゆびにてすりつかふ。にかハ、いらす。

一、あわせわうど

和しゆ、しわうと合つかふ。これをあわせわうど、もいひ、つくりわう」ど共いふ。かれ葉など、又ハいわ木の日おもてにつかふ。又ハ金でい」などの下に是をぬる。

一、わうどの具

にかハ合のごふん、わうどを入、うすきこき見合。枯葉、極さいしきの」岩など、

日おもて、あるひハとらのかわなど、諸事下ぬりにつかふ。」又ハ極さいしき一さいのとり、けたもの、したにつかふ。

一、きちや

にかハ合のわうど、ごふんあわせ、しわうを入つかふ。

一、わうど

すり木にてよくこまかにすり、やはらか成もちのかげんに、にかハを」水にてのべつかふ。

一、しわうのぐ

にかハ合のごふん、しわうをくわへ、こきうすき見合につかふ。(二ウ)「

一、たん

すり木にてよくすり、にかハ合。水にてのへ、筆さきにてつかふ。

一、朱しよずみのぐ

にかハ合のしゆと、すミをすこしくわへ、ごふんを入。これをしゆ」ずミのぐといふ。あるひハくりいろのたくひなり。

一、しゆずみ

にかハ合のしゆと、すミを少入、あるひハためぬり、くり辺につかふ。」きなるときハたん、わしゆにて合。くろミこのむときハ、くわうめう」しゆにて合。

一、くち葉は

にかハ合のごふんに、たんをくわへ、も、いろにしてつかふ。その」ひたるうへに、しわうをひく。

一、あをちや

にかハ合のあいろう、こふんにて、こきあさきに合、しわう少入、つかふ。

一、こぶちや

にかハ合のごふんに、すみをくわへ、くろめに合ぬり、ひたるうへに「しわうをうすく引。

一、きがらちや

にかハ合のたん、ごふんにても、いろに合、しわうを入、ぬりつかふ。

一、みるちや

うすずみをぬり、ひたるうへに、しわうをぬる。

一、あさぎ

にかハあわせのこふんに、あいろうすこしくわへ、こきうすきいろく「見あわせ、つかふ。

一、すみのぐ

にかハ合のごふんに、すみをくわへ、うすねずみ、こいねずみ、其ほか「見合につかふ。(三オ「三」)

一、もへぎ

にかハ合のごふん、あいろうをすこしくわへ、あさぎいろをぬり、ひ「たるうへにしわうをうすく引。

一、かほのぐ

にかハ合のわうどに、ごふん合、すみを少入、わしゆを少くわへ、「老人らうじんのめんていにこれをつかふ。

一、同

にかハ合のわうど、ごふん少入、わしゆ少入、中としの人形ぎせうのめん「ていにつかふ。うすきこきハ見合つかふ。

一、同

にかハ合のごふんに、わうど少、わしゆすこし。これは女人小児にのめん「ていにつかふ。うすきこきは見合。

一、木のぐ

にかハ合びやくろくに、すみ少入。諸事しよじ、樹木うへきにこれをつかふ。

一、ひはちや

にかハ合のびやくろく、ごふん少入、ひたるうへにしわうをひく。

一、地くろいろ

にかハ合のえんじのむらさきに、すみをくわへつかふ。是をくろべに「とも、地くろ共いふ。

一、かのこ

地あかにハ、にかハ合のごふんにすこししゆをくわへ、ほそきふてにて「ひとつぶつ、かのこにつかふ。

一、あい色のたぐひ

く、りくまのときハ、あいろうにてくまとる。

一、もへぎ色の類たぐひ

草のしるにてく、り、くまとる。

一、人形のたぐひさいしきしようの事(三ウ)「
 いろあるたぐひぬりしあげて、そのうへに、えもんぐりといふ事、」かげひなた
 あり、よくく見合。しやうえんじにて、く、りぐま」口伝あり。

一、草花さいしきし用

葉にうらおもてあり。うらくきともに、びやくろくをつかふ。「おもて葉ハ、下ぬ
 りびやくろくにてぬり、葉かぞおほきときは」わうどをもつて枯葉をつかふ。おも
 て葉のびやくろくのうへに」ろくせうをつかふ。

一、あさがほききやうかきつばたのたぐひ

このさいしきのときハ、花のうらおもてともに、あさぎにてぬり、其」うへに、せ
 うえんじのくまをとり、ひたるうへにぐんぜうをうすくひく。

一、ぼたんしやくやくつばきも、梅のたぐひ

紅花の辺のときハ、下にくしきにてぬり、そのうへに朱をう」すく引。うへにせ
 うえんじぐまあり。うすいろのときハ、えんじの」ぐにて花をぬり、そのうへにせ
 うえんじにてくまをとる。はな」のすえよりごふんぐまあり。

右、合絵のぐ、にかハ入、夏之内ハ、其時々につかふほどこしらへ、もちゆへし。』
 すこしにても間有之候へば、くさり候ゆへ、やくにたち不申候。冬の(四オ)「四」』
 時分ハ、両日間有之候而も、くるしからざるなり。さいしき」之仕用、さまく口
 伝ありといへども、絵こ、ろかけの上ハ、いかやうにも其為せる人のはたらきにて、
 なるべきもの也。

〔竹雀図〕(五オ)

〔桜雀図〕(五ウ「上」・六オ)

〔梅に水仙図衝立〕(六ウ「上」・七オ)

〔竹に牡丹図衝立〕(七ウ「上」・八オ)

〔松図衝立〕(八ウ「上」・九オ)

〔牡丹と撫子の輪つなぎ模様〕(九ウ「上」・十オ)

〔朝顔と水仙の輪つなぎ模様〕(十ウ「上」・十一オ)

〔鯉魚図〕(十一ウ「上」・十二オ)

〔蟹と貝図〕(十二ウ「上」・十三オ)

〔騎馬武者図(追跡)〕(十三ウ「上」・十四オ)

〔騎馬武者図(格闘)〕(十四ウ「上」・十五オ)

〔騎馬武者図(討取)〕(十五ウ「上」・十六オ)

〔芙蓉と牡丹図〕(十六ウ「上」・十七オ)

〔菊・水仙と梅図〕(十七ウ「上」・十八オ)

〔波鷺図〕(十八ウ「上」)

(わただみのる・企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)